

福井県支部便り (辟雍会通信9号)

「 Y 君のこと 」

柴田利郎 (A 類保健体育) 1981年3月卒

元三方郡美浜中学校 校長

私は大学を卒業後、教員として 37 年児童生徒に関わり、平成 30 年に定年退職した。その間様々な児童生徒と関わってきたが、その中の一人 Y 君のことを皆さんに紹介したいと思う。

Y 君は今 47 歳のはずである。彼は中学 2 年生の 2 月に京都から転校してきた。そして私のクラスの一員となった。体の大きい彼は京都の中学校では柔道部に所属していた。その大きな体と柔道部に所属していたということで、クラスの仲間の第 1 印象は怖そうな男の子というものであった。三方中学校には柔道部はなかった。それで彼は、何部に入るのか迷った。クラスの男子は彼の運動神経を見抜いていて、皆から自分の部に入ってほしいと懇願されていた。さんざん迷ったあげく、私が顧問をしている陸上部に入り、体を活かして砲丸投げをした。4 ヶ月ほどの短い陸上部での活動であったが、その間県の大会で上位に入るなど、活躍した。

彼は、こちらでの生活にもすっかり慣れ、春には魚釣りや山菜採り、夏には学校横の川での水遊び、秋には野山の木の実やきのこ取り、冬には雪遊びなどおおいにこちらでの生活を堪能していた。中学校を卒業し彼は多くの仲間とともに近くの美方高校へ進学した。

高校では彼はボート部に入った。持ち前の体力と根性で、ボート部のキャプテンとして、インターハイや国体で全国の上位入賞を果たした。高校を卒業し彼は大学へ進学した。大学でもボート部のキャプテンとして活躍した。

大学 4 年のある日、彼から私に相談したいことがあると連絡が入った。久しぶりに会った彼は立派な一人の青年として成長していた。相談したいといった内容は「私の夢は先生と一緒に同じ学校で勤務することだが、教員免許に必要な単位を取得するためには、もう 1 年大学へ通わなければならない。どうしたらよいか」ということであった。



(次ページへ)

私は「自分の人生だから後で後悔しないようにしたらどうか。ただあと1年大学へ通うなら、お家の方にしっかりお願いをしなさい。」と言ったと思う。

それから半年ほどが経ってから、彼の母親からはがきが届いた。それには、Y君がオートバイに乗っていて事故に遭い、何度も心臓が止まるような大けがをしたこと、希望を持って生きていること、近くの病院で入院していることが書かれていた。

私はすぐに彼の入院している病院へ向かった。病院のベッドに彼はまっすぐに上を向いて横たわっていた。私の方へ目だけを向ける様子から体が自由にならないことを悟った。Y君とお母さんからいろいろなことを聞いた。事故後、Y君は3度心臓が止まって危篤状態になったこと、そしてその都度生き返ってきたこと、脊髄を損傷していて胃や内臓も薬で動かしていること、お母さんはY君が生きていてくれるだけでいいと思っていることなどを聞いた。そして彼は「僕は今の自分にできることを一生懸命にやって生きいく。体は動かなくなったけれど、希望を持って生きていく。」と語った。その言葉に私は大きな衝撃を受け、あふれる涙が止まらなかった。

現在、彼は家族や地域の方々に支えていただきながら自宅で生活している。人一倍活動的であった彼が自分の意思ではどうにもならない体をさぞかし、嘆いているのではないかと考えていたのだが、彼はまったくそんなことを考えていない。彼は今の自分にできることを探しながら精一杯毎日を生きていくことだけを考えている。



今号は、柴田利郎様に寄稿していただきました。

次回の辟雍会通信は、6月発行を予定しています。

辟雍会通信につきまして、ご意見・ご提案等がございましたら、お寄せください。

季節の変わり目、皆さまにはくれぐれもご自愛ください。

(福井支部事務局担当：小林弥寿夫)